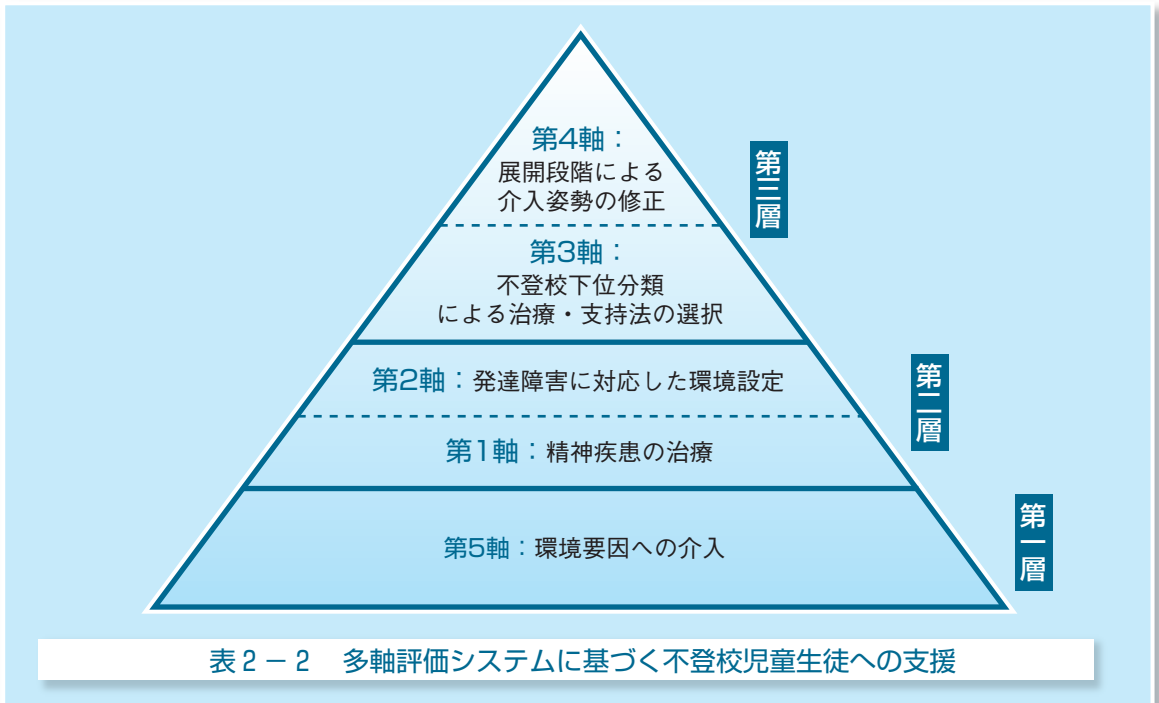


## 第4節 多軸評価システムに基づく不登校児童生徒への支援

不登校に対する治療・援助は多軸評価の結果を反映させて、組み立てられるべきものです。ここでは図2-2のように三層構造の「不登校支援システム」として示しておきます。



不登校支援の土台にあたる第一層は、多軸評価第5軸の環境に関する評価結果にもとづいて治療・援助の基本的な方向を定めることが主な課題です。虐待が進行している子どもの不登校では、不登校について考慮する以前に、虐待に対する対応が最優先され、児童相談所への通報を含め、まず子どもを有効に保護することが第一目標となります。その他の家族機能に限界をもたらしている家庭状況やライフイベント（家族の病氣、死去、両親の離婚、父親の単身赴任など）が明らかかな場合には、何をどのように支えれば家族機能を回復させ、不登校解決のための有効な援助を提供することができるかを検討しなければなりません。また、学校環境の評価を通じて、学校の誰と連携すべきかが明らかになっていくでしょうし、学校にどのような援助を期待できるかが明確になっていくでしょう。また、民間のフリースクールなど地域に学校とは別の活発な援助システムが存在するなら、それを利用することで、学校には復帰できそうもない子どもを援助することもできます。

不登校支援の第二層は、多軸評価第1軸（背景精神疾患）と第2軸（発達障害）の評価から導かれた不登校の背景に存在する精神疾患及び発達障害を直接治療・援助の対象とする部分です。第1軸評価で精神疾患の診断が確定した場合、その疾患固有の治療を提供し、その結果疾患が軽快していくと不登校も改善するということが少なくありません。例えば、不潔恐怖のため手洗いなどの儀式に長時間束縛され不登校となった中学生が、薬物療法と行動療法などの治療を受け、強迫症状が軽くなるにつれて徐々に登校できるようになっていったという事例もあります。注意欠陥／多動性障害やアスペルガー障害などの発達障害を背景に持つケースの場合、各々の疾患に

## 第4節 多軸評価システムに基づく不登校児童生徒への支援

特有な認知機能の障害を前提とした教室環境の構造化と特別な教育的支援の導入により、子どもの教室での不安と混乱を軽減することが可能となり、不登校傾向を改善できるのです。また、統合失調症や双極性気分障害等の精神病性疾患は、当初「不登校」以外の特徴を見出せないことがあります。そのような場合にも、時間の経過につれて精神病症状や気分の異常な高揚（躁状態）などが明らかになり診断がはっきりしてきたら、速やかに薬物療法を中心とする医療介入を開始すべきです。

不登校支援の第三層は、不登校下位分類の各型に固有な人格傾向や、不登校の各段階特有な心理状態に対応した治療・援助法の組み立てを行うための層です。環境要因への介入（第1層の治療・援助）や疾患特異的治療（第2層の治療・援助）がより一般的な支援であるのに対して、この層は不登校に特異性の高い支援ということになります。支援者は、「過剰適応型不登校」の子どもの過剰適応的な背伸びの背後にある傷つきやすさに共感しつつ、このタイプの子どもの「本当の自分」と直面できる段階まで支えるべきですし、「受動型不登校」の子どもには援助を急ぎすぎて彼らを怖がらせないよう穏やかでデリケートな配慮が必要ですし、「受動攻撃的不登校」の子どもではその見せかけの受動性に惑わされることなく、「命令しない、罰しない、しかし関心を持ちつづける」という姿勢を辛抱強く保たねばなりませんし、「衝動統制未熟型不登校」の子どもの場合、辛抱強さとともに、行動化に対する制限を大人の怒りや嫌悪の表現と感じさせない工夫と姿勢が一貫して求められるでしょう。また、不登校の時間経過によって支援者は段階特異的な治療・援助を行わねばなりません。支援者は「不登校開始段階（図2-1）」の混乱状況への介入は、あまり単一の介入姿勢に原則化しないほうがよいようです。支援者はまず、この時期の混乱状態の中で展開する子どもの状態像、親子関係の特徴、学校の介入姿勢などを偏見なしに観察することから始めましょう。まずは親や学校がそれぞれに持てる手段とこれまでの結びつきの歴史を踏まえて子どもと真剣に向かい合うことに取り組んでもらいましょう。この段階では、いたずらに絶望したり焦ったりせずに、子どもの気持ちに耳を澄まし向かい合うことに意義があると支援者は関係者に伝えましょう。「引きこもり段階」では混乱状態はある程度おさまる傾向にあるものの、変化に乏しい膠着状態が続くため、子どもとの共生関係に陥りやすい母親を孤立させないよう家族、特に両親を支援することが中心になります。「社会との再会段階」に入る頃から、多くの場合で本人が治療・援助の場に登場するようになります。この段階の治療・援助は、前段階で行っていた親機能（家族機能）の支持を続けるとともに、登場したばかりの本人の傷つきやすい心を支え、家と社会を結ぶ中間段階の集団と居場所を提供するとともに、やがては本格的な社会参加への挑戦のためのソーシャル・ワーク的支援へと展開していきます。

不登校支援は、これら三層の支援システムの各支援が有効にかみ合ったとき大きな成功をおさめるものであり、この各支援の食い違いが生じてくる際には多軸評価の再検討を行いながら、支援法の内容や組み合わせの修正を行っていくべきです。